

明日の空は天気雨

コルメ

プロローグ 帰り道の霧

六月初旬、もうすぐ梅雨に入ろうかという季節のある日の夕方。僕は外出先から家に向かっていた。

グウとなるお腹に少し早足になりながら歩いていると、少し寂れた神社を見つけた。考えてもみればこの道は通ったことのない道で、そこに神社があることすら知らなかった。ただその時のその神社は、明らかに普通ではなかった。そこには、もう日暮れだというのに霧が立ち込めていて、さらに、奥に何かが目に入った。

(あれは……人?)

時間にそぐわない霧に、人影。気になって神社に入ろうとした矢先、スマホが鳴った。親からの、晩御飯だから早く帰れとのメッセージ。僕は神社に入りたい気持ちを抑え、家へと帰った。

一章 大学のわか雨

次の日、大学生である僕は、この日最後の授業を受け

ていた。正直退屈だったが、単位を落とすのも困るので人並みには真面目に受け、終了時刻を示すチャイムを待っていた。

そして、ようやく授業が終わり、ひとまず今日の授業は終わったなと一息ついていると、友達の久保と田宮が話しかけてきた。

「さっきの授業どうだった？」

「いやー、オレ正直眠くてさー、めっちゃつらかったわー。」

「なんだお前もかよ、俺ももう寝ちゃってたわ。」

二人とも揃って、典型的なフマジメだ。

「なあ谷津ー、お前はどうせいつも通り受けてたんだろー？テスト前にノート、よろしく頼んだわー。」

谷津、というのは僕の名前だ。この割と仲のいい三人の中でまともに授業を受けていられるのは残念ながら僕ぐらいで、テストの度にこうして二人からせがまれるのが常だった。

「いや、そもそも寝るなよ……。」

「できたら毎度頼んでねえって。」

「だよな。知ってた。」

そんな他愛もない話をしつつ、家に向かうかと学校を出た辺りでのことだった。

ポツリ。

ポツリポツリ。

雨が降り始めた。

「雨!? マジかよ聞いてねえよ……。悪い、ダツシユで先帰るわ、じゃあな!」

突然降り出した雨に、久保が悲鳴を上げつつ走って行った。そして僕が折りたたみ傘を取り出していると田宮が、

「雨かー、いやーバス通で助かったわー。でもとりあえずバス停まで傘、頼むわー。」

と言って、バス停の方を指さした。

(今日の天気予報は思いつきり雨マークだったのにな……)

仕方ないから田宮をバス停まで送り、それから僕は、歩いて家に帰った。

第二章 散歩道の霧

「ただいま。」

シトシトと降る雨の中、僕が家に帰り荷物を置いてみると、飼い犬のクウが駆け寄ってきた。やんちゃなクウは雨だろうと関係なしに外で遊びたがるので、レインコートを着せ、傘を差して、

「行ってきます。」

これが僕の日課だった。

クウに連れられて、晴れの日も雨の日も散歩に出かけるが、雨の中の散歩は嫌いではなかった。なんともいえない、雨の日だけに漂う香り。この香りが、僕は好きだった。

その散歩の途中、この間の神社の前を通った。そこにはやはり霧が立ちこめていて、その向こうに人影があった。僕は気になって、クウとともに神社の境内に入った。

境内に入って少し歩いたぐらいのときに、フツと霧が晴れた。そして神社の屋根の下に、一人の少女がいた。

少女はこちらを見て、その顔に笑みを浮かべた。

「君、好きな天気は?」

「えっ、好きな天気? まあ、今みたいな雨は好きかな。」

少女が急に話しかけてきたことに少し驚きつつも、僕はそう返した。するとその少女は、

「ふうん。雨か、悪くないね。私も雨は好きだよ。」

と、何かを探るように言い、そのまま

「まあ私は、どんな天気も好きだけどね。」

と付け加えた。「ただね、」

「あえて選ぶなら、私は天気雨が好き。」

「天気雨?」

「そう、天気雨。晴れの日って気分爽快で心地いいでしょ?そして雨の日は、雨がすべてを流してくれるような

感じがする。天気雨の日は、その両方。だから私は、天気雨が好き。」

少女がそういったときだった。さっきまでどんよりと曇っていた空に、急に晴れ間が覗いた。

「おや、噂をすれば天気雨、偶然だね。」

そんな偶然あるだろうか。そう僕が不思議がっている

と、少女が笑いながら口を開いた。
「そんなに不思議がつて、どうしたの？天の気まぐれつてやつだよ。」

「いや、そうは言っても……。」

「それより君、散歩の続きなら今のうちなんじゃない？」

そうだった。神社のことが気になりすぎて忘れかけていたが、今はクウの散歩の途中だった。慌ててクウを探すと、彼は僕の足下で、退屈そうに伏せていた。僕はクウを連れて少女に、

「ありがとう、それじゃ！」

と言うと、歩いてきた道の方に向かった。少女は、会ったときと同じように、笑顔で、手を振っていた。

境内から出ようかという辺りで、再び霧が立ちこめた。なんだと思つて周囲を見渡していると、その霧はすぐに晴れた。神社の方を見やると、そこには少女の姿はなかった。ただ雨が降っているだけだった。少女はどこに行つたのかと気になり僕は神社に戻ろうとしたが、ク

ウが引つ張つてきた。これ以上彼をないがしろにするわけにもいかず、僕はそのまま散歩を続けた。

三章 大学の通り雨

翌日。僕は昨日の出来事を久保と田宮に話した。

「ホントににいたんだつて、勘違いな訳なんてない！」

「はいはい、ドーせ夢でも見てたんだろ。霧に紛れて消えた？ありえねえつてそんなの。」

「いやでも……」

「狐とかー、あとは狸とかに化かされたんじゃないの？なんちやつて。」

「絶対違うつて、この目で見たし、話もしたし！名前だつて……、あれ、名前……」

そういえば、あの時お互いに名前を言わなかった。

「名前が出てこないんじゃないや、やつぱり夢だつだんじゃないの？」

二人ともまるで信じる気もなく、それ以上この話題を続ける気にもならなかった。そのまま昨日のテレビ番組の話題になり、適当に流しつつ会話していた。

(名前、なんていうんだらう、あの子……。)

三人で次の講義がある部屋に向かつていた時のことだった。視界の隅に、見覚えのある少女の姿が映つた。昨

日の、あの少女だ。僕は少し近寄って声をかけた。

「ねえ君、昨日は」

しかし、そこまで言ったか言わないかのあたりで少女は、追いかけてみると言わんばかりに微笑み、走って逃げ出してしまった。

「あつ、ちよつと！」

僕はどうにも気になって、少女の後を追いかけて走り出した。

少女の足は風のように速く、いくら走っても追いつけない。それどころか、時折こちらを振り返って微笑むほどの余裕があるようだった。そして、人通りの少ない裏路地に出た辺りで、彼女の姿は消えた。そこにはやはり霧だけが残り、さらにどこからか声が聞こえた。

「週末、例の神社でね。」

声は、その少女のものだった。

僕があつげにとられていると、霧は晴れ、そこにはいつもの路地裏の風景が広がっていた。

遠くから聞こえるチャイムの音で、我に返った。焦って時計を見ると、時計の針は次の講義が始まる時刻を指していた。

「やばっ！」

僕は今まで来た道を走って引き返した。

四章 オモネ様の雨

その週の土曜日、天気は晴れ。僕はまた例の神社へ向かった。その神社が見えてくるとやはり、その神社は以前と同じように霧に包まれていた。鳥居をくぐり、境内に入ると、その霧は何事も無かったかのように消え、目の前にあの時の少女が現れた。

「やっぱり来たね。思った通り。」

少女はまるで、僕が来ることが分かっていたかのように言う。

「そういえば、君の名前を聞いてなかったね。君、名前は？」

「名前？名前は、谷津モトキだけ……。」

「ふうん。谷津くんか。私は天沢ミドリ。アメサワ、ね。アメサワじゃなくて。」

「天沢さんか。改めてよろしくね。」

「こちらこそ、よろしく。」

そこで少女——天沢さんは、後ろを向き、

「今日は、この神社の話をしよう。谷津くんは、この神社がどんな神様を祀ってるか、知ってる？」

僕はそこまで信心深い人ではなかった。

「どんな神様を？言われてみれば知らないな。」

「そっか……、それは残念。今日を機に覚えてね。この神様は、天気を司る神様。オモネ様って言うんだよ。」

「オモネ様、へえ、そうなんだ。」

正直なところ、聞いたこともない名前だったので、少し申し訳ない感じがした。

「まあ若い神様だからね、知らないのも無理はないかな。」

「若いって、神様に若いとかお年寄りとかあるの……？」

「そりゃあるよ、例えばアマテラス様とかツクヨミ様とか、みんな知ってるようなすくく有名な神様達は、もうものすくく高齢の神様。歳をとったからって力が衰えるわけじゃないんだけど、最近になってから——最近と言ってもここ五百年とかだけど、そのあたりで生まれた神様が、そういう高齢の神様に代わって仕事をすの。オモネ様はだいたい三百歳だったかな。先代の天気を司る神様に代わって、天気を管理してらってわけ。」

「さ、三百歳でも若いんだね……。」

「まあ、そこは神様だから。」

「それにしても、だいぶ詳しいんだね、オモネ様について。」

「ああ、言ってなかったっけ。私はこの神社の巫女をしてるの。自分が仕える神社の神様について、知ってる

のは当たり前だよ。」

巫女さん……、そう言われてもピンと来なかった。この神社には、彼女以外の人がいるように思えなかったのだ。巫女さんがいるような神社なら、神主さんとかもいるだろうということは、僕でも分かった。

そこで天沢さんは、僕の心を先読みするかのようになり、笑いながら付け足した。

「まあ、巫女って言っても自称だけだね。掃除とか、植木の世話とか、したいからしてるだけ。」

「なるほどね。」

「例えば、ほら。」

そう言って彼女は、境内にあるアジサイの並木道の方へ駆けていった。傘を差しながら僕も付いていって、視界の両側に茂るアジサイを見る。

「このアジサイ、ちょうど今が見頃だね、すっごくキレイじゃない？」

彼女の言う通り、雨の雫滴るアジサイは、見たこともないほどにキレイだった。青、赤、紫、緑。アジサイたちは、それぞれが主張しすぎずに、お互いがお互いを立てるように咲いていた。

「これ、私が世話したんだよ！」

僕がアジサイに魅入っていると、彼女は自慢気にそう言った。

しかし僕はそこで、一つ気にかかった。雨？雨なんて

いつから降っていただろうか。ここに来るまでも、来てからも、ずっと晴れていたはずだ。今だって空を見上げれば——やっぱり晴れている。でも顔には、ポツポツと雨粒が当たった。そしてそれなのに、彼女は傘を差していないかった。

「また、天気雨？ いつの間に……。」

僕が呟くと、彼女は何食わぬ顔で、

「おお、オモネ様がアジサイをキレイに見せるために降らせてくれたのかな？」

「いやいやまさか……。」

さすがにそれはないだろうが、やっぱり不思議なことが起きる神社だ。何度見てもキレイなアジサイを前に、僕はそう思った。

それからというもの、僕はクウの散歩の時や、暇があるときには決まってその神社に行くようになった。不思議なことが起きるのが、どうしても気になった、というのが一つの理由だ。原因を突き止めて、久保や田宮を陰らせてやりたかった、というのも確かにあった。だが、それだけが理由ではない。天沢さん——彼女といると、なぜだか楽しかったのだ。

彼女とは、色んな話をしたが、特に記憶に残ったのは天気の話だ。晴れのこと、曇りのこと、雨のこと、雪のこと、風のこと。ある時には、雷のことなんかも話し

た。

「雷ってさ、よく鬼みたいな雷神様が怒った顔して落ちてるイメージあるじゃない？」

「まあ、確かに昔話とかでよく見るね。」

「あれも、完全に間違いではないんだけど、ちよっと違うんだよね。雷には、そもそも二種類あって、雷神様とかが落とす怒りの雷と、オモネ様とかの、天気を司る神様が落とす雷とがあるの。オモネ様は、なにも天の怒り！ って雷を落としてるわけじゃなくて、自然のバランスをとるために雷を落としてるの。定期的に放電しないと、空に電気が溜まって、大変なことになっちゃうんだって。」

「へえ、バランスをとるため、かあ。それでもやっぱり、雷は怖いかな……。」

「まあ、確かにちよつとは怖いよね。でも、雷の写真とか、見たことない？ 壮大で、結構キレイだよ？」

「うーん、見たことはあるし、それは割とキレイだとは思うけど、でも、やっぱり雷は怖いよ。近くに落ちたら……って思う。」

「近くに落ちたら、かあ。オモネ様は人を殺したいわけじゃないだろうから、オモネ様の雷なら安心なんだけどね……。」

やっぱり不思議なことに、その翌日の天気は雷雨だっ

た。近くには雷が落ちなかつたので良かった。

五章 梅雨明けの雨

そんな日々を過ごして、天気予報では、とうとう梅雨明けの話題が始めた。僕が住む辺りの梅雨明けは、来週半ばとの事だった。

その週の土曜日、僕は、いつものようにオモネ様の神社を訪れた。神社には、いつものように、霧が立ち込めていて、中に入ると、いつものように、霧が晴れて、その奥の方の軒下に、いつものように、天沢さんがいた。いつも天気のことをよく話していたので、僕は必然的に、梅雨明けについて話を振った。

「来週には梅雨明けだって、早いものだね。」

「来週……、そうだね、あつという間だったね。」

今日の天沢さんは、どうしてか少し悲しそうだ。

「梅雨が明けるの、そんなに寂しいの？確かにアジサイの季節は終わっちゃうけど。」

「ん、ああ、いやそういう訳じゃないんだけどね、七月は七月でキレイなものはあるし。」

「そしたらどうしたの？何かあった？」

しかし天沢さんは何も言わず、黙り込んでしまった。

いつもは天沢さんの方から話しかけてくるのに、本当に一体どうしたのだろう。

しばらくの静寂。そして、雨が降り始めた。ポツポツ。境内の石畳に、雨が一滴ずつ滲んでいく。シトシト。緑鮮やかなアジサイから、水滴がこぼれ始める。ザアザア。雨は次第に強くなって、軒下にいる僕らにも斜めに吹きつける。

そして、再び静寂。いや、むしろ雨音が全ての音を塗り替えていた。

天沢さんの方を見ると、彼女はひたすら俯いている。僕は、彼女に何を言うべきなのか、分からなかった。

どれだけの時間がたったのだろう。三十分？一時間？或いはそれ以上かもしれないが、実際のところは分からなかった。ただひたすらに雨音だけが響き、無限にも思える時間が流れていた。

そんな中で突如天沢さんは、自らが雨に濡れるのも厭わずに一步二歩と歩き出し、そっぽを向いたまま呟いた。

「嘘。」

「嘘をね、ついていたの。」

「でもね、」

そこで彼女は振り向いて、僕の瞳を見つめて言った。

「その嘘は、今日でおしまい。」

彼女の顔が見える。

「そしてね。」

その顔には、

「君と会うのも、今日でおしまい。」

雨と涙が流れていた。

「……え？」

理解するまでにだいぶ時間がかかった。

「梅雨が明けたら、君はもうここには来なくていい。」

「ど、どうして？」

「私はこの自称巫女をしている、そう言ったね。」

「う、うん……。」

「ごめんね。あれは、嘘。私は巫女さんなんかじゃない。そしてその嘘は、今日でおしまいにする。」

嘘？ なら今目の前にいるこの少女は、一体何者だと

言うのか。心の中では疑問に思った。だが、体はそれに

応じず、固まったまま動けなかった。

「君は、特別だから。だから、嘘はやめ。」

彼女がそういった途端、どこからともなく出てきた霧

が彼女を包みこんだ。

「私は……、いや、わしは、神だ。」

聞き覚えのある声と、馴染みのない口調のセリフが聞

こえてきた途端、その霧は晴れた。僕の目に映ったのは、

天沢さんととてもよく似た、しかし似ても似つかぬ

和装の、紛れもない『神様』といった雰囲気少女だった。

「わしは、おぬしらの言うところの神だ。名はオモネ。

この神社で祀られておる、というのは、確かもう言ったな。」

信じられなかった。今日の前にいる存在が、自らを神

と語っている。しかし僕の全神経は、それが神だと認識

していた。否定の種は、なかった。

「おぬしも知っているとおり、わしは天気を司る神だ。

わしには、天気を管理・調節するという、大切な仕事がある。そして今の季節には当然、梅雨の管理をしてい

る。いつ梅雨に入り、いつ明けるのか。わしが調節しなければ、そのバランスは崩れ、少なくとも人は生きてい

けなくなってしまうだろうの。」

「そ、それで……？ どうして、会えなくなるの……？」

ようやくほんの少しの冷静さを取り戻した僕は、なんと

とか一言を捻り出した。

「わしはまだ神としては若輩者だな。お師匠さんほどの

力がない。それゆえに、力を及ぼすためには、その対象

のある程度近くにいる必要があるのだ。だから、この地域の梅雨明けを完了させたら、わしは北へ向かわねばならぬ。」

「そんな……。でも、じゃあそれより後には？やることに無い時期とかはないの……？」

「おぬし、この国がどこ分かって言っておるのか？台風、紅葉、寒波、そして花の開花。わしがやらねばならぬことはいくらでもある。だからわしは、ここに居続けることはできぬ。」

それは、嫌だ。直感的にそう思った。これが僕の幼稚なわがままなもの、人と神、生きる世界が違うことも分かっていたが、それでも嫌だと思った。

「それは……嫌だ。」

そしてその思いは、そのまま口に出してしまった。

「ふっ、何を言うておる、おぬしは小童か？」

「わがままなのは分かっている、だけど……だけでもう君と会えないなんてのは、やっぱり嫌だ。」

「なぜだ？」

「……え？」

「おぬしはなぜそこまでしてわしといたいと思う、言うてみい。」

「それは……」

多分、その理由は分かっている。だがその気持ちは、神に向けられるようなことだろうか。

一瞬の自己問答。しかし答えは揺るがなかった。

——人とか神とかは関係ない。

「それは、天沢さん……いや、君のことが、オモネ様のこと好きだから。なぜかは分からないけれど、何回も会っているんな話をするうちに、君に惹かれていったんだ。確かに僕は人で、君は神。人が神に恋をするなんて馬鹿げた話だけど、でも僕は、僕が君と一緒にいたいと思う理由を、そこにしか見つけられない。」

「ふふっ。そうか、やはりそうか。」

やはり……？ オモネ様は一人笑っていた。

「曲がりなりにもわしは神だから、人の事考えることなどすぐに分かる。さすがに確信はなかったがの。」

「じゃあどうしてそんなずい質問を……。」

「単純なこと。わしの予測が間違っていてほしかったのよ。」

「……間違っていてほしかった？」

「わしはこれまで三百年近く生きてきた。わしが子供だった頃にいた人の子らは、わしが独り立ちした頃にいた人の子らは、もうこの世にはいない。当然だ。神と人とは、流れる時間のスピードが違いすぎる。」

「これまで、多くの死を見てきた。友の死に涙を流した。そして、わしは悟ったのだ。わしは取り残される側なのだ。嘆き、悲しみ、涙を流し、一人になる側なのだ。だから、神以外に深く干渉することをやめた。」

「……ん？ ならばどうして……」

「だがおぬしが、わしの前に現れてしまった。」

オモネ様がじっと、僕を見つめる。

「おぬしといるのは、なんというか、あつたかいものであつた。」

オモネ様の笑顔に、涙が流れる。

「わしとて、ずっとここにいてもよいのならそうしたいものよ。だがわしには使命がある。」

それに、とオモネ様は続ける。

「それに、わしはおぬしの死に顔を見たくはない。」

オモネ様の顔は、もはや涙でグシヤグシヤになつていた。

僕にできたのは、何も言わず、彼女に寄り添うことだつた。

少しして雨は弱まり、雲に切れ間が見え始めた。そこで冷静さを取り戻したオモネ様が口を開いた。

「……時間だ。わしはもうここを發つ。」

「時間……。ああ、分かつた。」

涙目でよく見えないが、多分オモネ様はこちらを見ていない。そしてその周囲では、霧が現れる。

「少しの間だったが、おぬしのこと、嫌いではなかつたぞ。」

僕が涙を拭ってオモネ様を見ると、オモネ様は僕の方を振り向いてそう言い残り、霧に包まれ見えなくなつて

しまった。

霧が晴れ、僕の眼前には何の変哲もない神社の光景。

天気雨の中、僕はただ一人、立ち尽くした。

「……さようならすら、言えなかつたな……。」

エピローグ 明日の空は天気雨

梅雨が明けたあの日以降も、僕はオモネ様の神社に通つた。あの出来事は夢か何かの間違いで、また今までのように天沢さんに会えるのではないか。そんな虚ろな希望だけで動いていたが、当然、神社には誰もいなかった。

友達の話も、大学の講義も頭に入つてこない空っぽな日々を過ごして、早いもので一年が経とうとしていた。

テレビでは、梅雨入りの話題が始め、ああ今年もこの季節がやってきたか、と思つた。

その週の土曜日、その日の空は天気雨だつた。僕はまた、いつものようにオモネ様の神社へ向かう。神社が近くなる。もはや希望も枯れた思いで鳥居の方を見やると、そこには――

――そこには、霧が立ち込めていた。